批評・紹介

アジア史研究 第二

宮崎市定 著

昭和三四年八月 東洋史研究會發行
本文五七八頁 はしがき五頁
目次四頁 索引五三頁

これは歴史の敍述であると同時に私の歴史哲學でもある。私は歴史を敍述することから離れて、ただ理論だけを述べる方法を知らない人間である。（昭和三三年、日本文化研究一、所收「東洋史の上の日本」、内扉裏の題言。）

私（山田）は商業學校の出身で、正式の歴史教育を受けたものではない。今から六年前まで、二二年間ほど、香料會社の社員として業務に追われ、僅かに香料の歴史を追求しただけであるから、宮崎先生の著書を批評するなどとは、もつてのほかである。私が先生を知つたのは、恩師長崎高商名譽教授故武藤長藏博士と新村出博士の親交によつて、一九四〇年に新村先生より御紹介を受けた時であつたと思う。以來今日まで教示をうけ、先生は著書を出されるごとに一本を私に惠まれる。おかげで私はいつとはなしに〝宮崎ファン〟の一人となつてしまつた。日本の東洋史學の門外漢であるが、宮崎史學の熱心な讀者の一人として、本誌の編者から乞われるままに、私は私なりの感想を記して見たい。

「アジア史研究、第二」は一九四〇―四五年にかけての論文を收錄した、先生四〇―四五歳代の作である。次に先生の著書年表をあげ、今回の新著にいたるまでの宮崎史學の經過を語らせよう。

1959 アジア史研究Ⅱ
58 東洋史の上の日本
57 アジア史研究Ⅰ
56 九品官人法の研究
55 中國古代史概論
50 雍正帝，東洋的近世
47 アジア史概説
46 科學
45
44 菩薩蠻記
43 五代宋初の通貨問題
日出る國と日暮るる處
東洋における素朴主義の社會
40 民族と文明主義の
38 （海外留學）
36
25 （京大卒）
1901 （先生，生る）

すなわち一九四〇―四五年代の研究は「菩薩蠻記」その他の四著となつて、すでに〝アジア史的考察〟がのべられている。「アジア史研究、二」は、そのよるところを示すものである。しかし、この五年間に發表された論文の多くは、一九三六―三八年間の海外留學中に意圖されたようである。たとえば「サバリー、世界商業大辭典（一七四一年版）、伊朶赫德、萬物解（一八四八年）」による資料の提出は、留學中にそれぞれの書を入手されたためであろう（？）。西南アジア史の獨立は先師桑原隲藏博士に由來しても、それがたしかめられたのは近東地方の旅行と在佛中のイスラム研究ではなかつたか。それから中國史の時代區分は先師内藤湖南博士に求められる

が、先生獨自の中國古代都市國家論は、やはり留學時代につちかわれているようだ。（このような私の推定があたつているかどうか。先生が留學中に集められた書籍資料によつて、その一端をたしかめることができよう。しかし現在の私は先生の研究室に伺つて、それを調査する時間を持たない。）以上により、内藤・桑原兩先師にみちびかれた先生は、三六―八歳代の留學中に今日の宮崎史學にいたる構想と準備をつまれ、四〇―五歳代の精神的にも肉體的にも充實した時に、アジア史的考察を展開されたのであろうと考える。もちろんこの時期は祖國日本がかつて體驗しなかつた變轉の時代で、深刻な日常生活の困難が研究者の上にのしかかつていた。ところがこのことは、ある意味では京大教授としての先生に、明治・大正・昭和初期の大學教授に求めることのできない、一つの境域を開拓させたのではなかろうか。宮崎史學がシナ中心の東洋史から、世界史としてのアジア史へ發展したのは、先生の叡知と時代の苦悶によるものであろうと、私は解釋したい。

本書は二一の論文からなつているが、最後の雜錄を附篇とすれば、大體四部門にわけることができよう。

㈠　世界史としてのアジア史。

「世界史序說。歷史的地域と文字の排列法。中國文化の本質」の三つである。現在、歷史研究の對象としてとりあげやすいユーラシヤ大陸を、東アジア・西アジア・ヨーロッパの三歷史地域にわけ、各々の時代區分の相違をあげて西アジアの重要性を强調するとともに、三地域がたどつた歷史の姿を當然あるべきところにおかねばならないとする。（アフリカ・太平洋諸島・南北アメリカがとりあげられないのは、近世以前の歷史研究の對象としてまだはつきりしていないことと、先生の研究がシナを中心とする古代・中世・近世のユーラシヤ大陸におかれているためであろう。）この歷史的事實と、西アジアを中心とする東西交涉史を見ることによつて世界史像を描き出すのである。この場合インドと東南アジアの存在が氣になるが、先生は

印度は大きな社會であるが、ただそれが過去に於いて世界交通の大道から外れていた爲に、その世界史的役割は左程大きくないから、今は之を西亞史に附屬させて別に一項目を立てぬを便とする（七頁）。

と言う。インドの第三帝國的存在は古代・中世の東西交通からも見ることができる。しかしインド洋につき出たインド本土を中心に、西は西南アジアと東アフリカ、東は東南アジアとの關連において、いま一つの歷史地域が存在したのであろうと考えたい。たとえばイスラム侵入後のインドをもつて、インド本來のものが失われたと言えるであろうか。これは私の推定であるが、一六世紀の歐人渡來前の數世紀間、インドの綿糸布を中心とする西南アジア・東アフリカ・東南アジアを結ぶ商業經濟圏が成立している。その取引は主としてイスラム系商人ににぎられていたとしても、インド本土の綿花と綿糸布手工業の生產が根本であつて、インド本來の生產構造とインド社會の個性が嚴としてあつたのではあるまいか。また一四・五世紀のイスラム侵入以前の東南アジアについても、インド的存在の波及と東南亞個有の社會構造の發展變化を綜合分析することによつて、彼等本來の歷史を求め得るのではなかろうか。西アジア――→インド――→東南アジアをつないで、一つの歷史的系列におくことに、私は大きな疑問と不滿を持つものである。

先生は東西の古代史的發展の行詰りは、金銀の西アジア地域への流出による正貨の減少が、慢性的な不景氣を惹起したためだと言われる。たしかにそうであろう。（これは中世・近世史的發展のときにも、同じように考えられていると私は解している。）しかし〝慢性的不景氣〟という語が、あまりにも單純に素朴に使用されている。今日の我々のいう資本主義以前の時代の經濟生活の變化を、簡單に景氣變動の波長という言葉をもって解決し得るであろうか。これは先生研究の一つの中心である宋代の史的考察にもあてはまるように私は思う。とは言っても〝文字の排列法と中國文化の特質〟に示された文化史的事實が研究の根幹であろうから、私のとりあげた〝言葉〟の問題は、あるいは枝葉であるかもしれない。私は先生の三地域區分にインドを加えて四つとし、各時代區分を各々の歴史事實に求めたい。そしてこの四つの相互の關連を（東西交涉史として）、各地域の時代的發展の差異によって理解することが、よりよくそれらの世界史像を描き出すであろうと考えたい。近世までの困難な東西交通を敢行させ發展させたものは、各地域の生產構造の差異にもとづく社會生活上の根本的な欲求によるものではなかろうか。（と言っては見たものの、私にできそうなことではもちろんない。）

㈡　東西交涉史に關するもの。

以上のように見てゆくと、最初の三論文から途中をとばして、本書で多く取扱われている東西交涉史關係の八つの論文に言及せねばならない。「英佛連合軍の北京侵入事件」は、實にあざやかにシナ史料を中心として、わかりやすくまた興味をもたせるものがある。結論はヨーロッパ的體制が中國的體制にぶつかってきたものとされているから、シナ中心の歴史事實であっても、東西交涉史の一つと見てよかろう。ただ阿片戰爭の場合は歐州の資本主義と武力の二つが主動的地位を占めたが、北京事件のときはむしろ歐州的體制が主動者になっていると論斷される。固々の現象にあたってこのように分析することは、もちろんなされねばならない。しかしヨーロッパ側の要求した諸條約の項目より見て、單に政治的だけと割切れるだろうか。餘りにも明快に筆を進めすぎたきらいがありはしないか。一抹の不安の念を投じたい。

「昆沙門天信仰の東漸に就て。東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」は、先生の歴史ロマンスとして私をうっとりさせる。（これに該當するものは本書の中で他にもある。）先生はたしかに名文家である。單なる修辭上の點ではない。あくまでも忠實にまた精確に史料をふまえながら、情操ゆたかなロマンを展開する。そしてわかりやすい文章で、讀者をうっとりさせるような魅力をもっている。しかも學者としての態度と本分を決して逸脱しない。論文と言えば無味乾燥な、專門の人々のみが理解できればよいものと見なす態度がたしかにある。（また論文とはそんなものでなければならないときめている人もある。）この點において先生は廣く對象を一般に求める資格を具え、實現しておられる。そのようなことが、東洋史あるいはアジア史に素人である私を、宮崎ファンとするわけであろう。（閑話休題―ソレハサテオイテ）この二つは西アジアを中心に東西の關連の深さを實證し、併せて㈠の〝世界史としてのアジア史〟に結びつく。次の「宋元時代の西域」は一見簡素で無味無臭のようであるが、前の二つのロマンの背景をなす概說として讀むとき、幾多の問題の理解を讀者に與えるであろう。

「清代對外貿易の二資料」以下の四つは、シナを中心として見た

東（南）アジア史の研究である。清初の廣東貿易と南京條約直後の中國對外貿易統計の資料が紹介されている。私は先生の研究意圖がこのような部分にもあることを知つて、その幅の廣さに敬意を表する。「印度支那及び南洋史略說。中國南洋關係史概說」は、中國より見た東南亞史のアウトラインとして好讀物である。華僑の進出について安南・泰・馬來・スマトラ・ジャバと隨所に記されているが、中國僑民の發生原因とともに、それを受容れた東南亞諸國の社會體制の變化を併せて考える必要があろう。たとえば一四・五世紀のジャバ貿易都市の隆昌は、インド・イスラム・シナ商人が農林天產物の流通過程より生產過程に介入する餘地を與えたのではなかつたか。（馬來半島の錫鑛山の開發のように。）そこに中國僑民の勞働力を必要とするのであつて、東南亞社會構造の變化と中國僑民の特殊性が華僑の成立を促進させたのであろう。これはまたイスラムあるいはインド系商人にもあてはまり、學者によつて東南亞が複合社會であると主張されるゆえんであらうか。

一六世紀の葡西、一七世紀の英蘭（兩東インド會社）の進出を考えるとき、單に彼等の海上權力と相互の差異を見るだけではなく、彼等の香料貿易（胡椒・丁香・肉荳蔻）が、東南亞を中心としてシナとインドを結ぶ國際貿易にどれほどの影響を與えたか、また一六・七世紀の歐州諸國の間に差異があつたのか、などを觀察せねばならぬだろう。一六世紀末のリンスホーテンは、若干の銀さえあればインドから日本にいたる各地で、轉々と交換取引を重ねてゆくことによつて莫大な利潤が獲得できると言つている。このような狀態を作り出すのに（インドはしばらくとして）、宋元明初のシナの影響力如何。そしてこの "inter insular trade" による利潤が、一八世紀以後の歐米諸國の進出により減少してくる。それは英・蘭東インド會社の變貌、すなわち植民地主義的發展によるものであろう。この壓迫に對しアジアの僑民は、東南亞各地の流通生產過程の下部構造に滲透していつたのではなかろうか。そして特異な後進諸國が形成されたとすれば、中國より見た東南亞史は大きな問題を今後に殘している。

以上のように考え、「南洋を東西洋に分つ根據に就いて」に一言したい。嶺外代答・諸蕃志・島夷志略・瀛涯勝覽・星槎勝覽などに明白なように、一二―五世紀の間、ジャバは東（南）洋に屬し、東西洋の區別は周去非以來すでに認められている。ところが一七世紀初めの東西洋考にいたつて東西兩洋が判然と區別され、ジャバは西洋に入つている。以上を分つ根據は、福建あるいは廣東を起點とする南北子午線によつて區分されたのであると先生は論じ、シナ船の航海針路によるという從來の考え方と異なるものがある。私にはいずれがどうであると言う資格はないが、一二・三世紀以後のシナ船南方渡海航路と貿易形體の變貌によるものであろうと思われる。すなわち宋元明初代に本國と東南亞（あるいはインド）各地の主要港と直結するものが多かつたのに、一六世紀後半以後東南亞各地と中國を結ぶ "inter insular trade" に變化したのではなかつたか。一五一一年、葡人のマラッカ占領により、マラッカとジャバのイスラム系商人が、ボルネオ・セレベス・モルッカに强力な據點をもつようになり、東南亞島嶼間の貿易が擴大した。そしてシナ船（宋元明初より小型）は、東西洋考に示されている二つの針路の島嶼間貿易に從事し、とくに

マニラ―ミンドロ
パナイ―ミンダナオ―スルーソンキル
パラワン
ボルネオ東岸
ブルネイ

の間ではシナ船が優位であつた。またジャバースンダ―チモルのラインに活動するものがすくなくなつて、西洋針路の一支線としか認められなくなつた結果であろう。東西洋の區別は現實的な航海と貿易形體の發展變化によるもので、中國資料に對應して東南亞各島嶼間貿易の推移について知る必要があると思う。

㈢ 中國古代史の研究（社會經濟史學の發達―中國古代。賈の起原に就いて。漢末風俗。）

㈣ 宋代史の研究（五代宋初の通貨問題梗概。王安石の黄河治水策。南宋政治史概説。南宋末の宰相賈似道。書禁と禁書。歴史と鹽。）

この二部門について私はただ讀むだけで、感想を記し得ないほど無知である。ただ先生がノーマルな生活では問題としない鹽をとりあげて、商（賈）の起原を論じ、中國の歴史を鹽を中心に展開されているのに興味を禁じ得ない。物資不足の困窮生活が先生にそうさせたのであると簡單に言えばそれまでだが、先生は商品の歴史に多大の關心を持つておられるのはたしかである。その實例を本書以外の論考、あるいは先生の指導もしくは教示に發する研究に見ることができる。（先生と私のつながりもここにあろう。）

先生は京都大學の東洋史講座の教授として幾多の雄材を育成され指導されている。それだけに先生の學問の幅は實に廣い。しかしこの廣さは、本稿の首めに引用した先生の言葉にもとづいている。そして漢文資料を精確に素直に解釋する傳統を發展擴大させておられる。本書は宮崎史學の一部門にすぎないから、その全貌を示すものではなかろう。しかし〝はしがき〟の末に、

私がその後、東西交渉史の研究から次第に遠ざかつたのは、むしろ私の體力、腦力の限界からである。だから私は、いま私と同じ樣な狀態の下にある既成の諸家には別に多くを期待しない。反つて私は後生、新進の諸君が充實した活力で、私がやり殘した研究を進めてくれることを望んでやまない。

と記され、「丁度、泥沼に足をつつこんだようなもので、もがけばもがくほど拔きさしならなくなり、そんな苦しい演技には、誰も眞似することは勿論、拍手を送つてくれることもしない。」と言われている。これがほんとうの研究生活であろう。そこからにじみ出た本書は、後生の俊秀をはぐくむ〝ほんとうの意味の書〟であると私は信じている。私の感想は誤つていても、本書の眞價は嚴として各々の分野の讀者に訴えるところのものがある。（山田憲太郎）

（追記）羽田博士頌壽記念東洋史論叢（一九五〇年）所收の〝狼牙脩國と狼牙須國〟は刊行年次のためか本書にはない。しかし羽田博士還曆の一九四二年には既に草されていたと思われる。（同論叢序參照）

本書冒頭の「世界史序説」と次の二つは新しく起稿されたものである。しかしそれについての考え方は「菩薩蠻記」以來すでに示されている。先生の考察をまとめられたところに新稿の意義がある。